

主要展示品解説

1 茶系威桶側五枚胴具足 (出品番号 7)

大阪城天守閣蔵

着用者である^{あさのながまさ}浅野長政は、豊臣秀吉の妻おねの妹をめとった人物。義兄の秀吉に早くから仕え、側近として天下統一をささえた。秀吉の死の直前には政権運営の中軸となる五奉行の筆頭にすえられたが、他の四奉行とは異なり、関ヶ原合戦では長政のみが徳川家康の東軍に属した。

中心が稜線状にとがった^{ももなりかぶと}桃形兜は、戦国時代に普及した形式。本品ではこれに^{おおすいぎゅう}大水牛の^{わきだて}脇立をつける。その兜や胴には、強度をたしかめるための試し撃ちの弾痕が多数みられる。またよろいの随所に、円の中で鷹の羽をクロスさせた浅野家の家紋があしらわれている。



2 富士御神火文黒黄羅紗陣羽織 (出品番号 33)

大阪城天守閣蔵

陣羽織とは、武士がよろいの上に羽織った上着である。本品は豊臣秀吉の所用と伝わる。

背面に黒と黄の羅紗で富士山を大胆に表現する。山頂からは噴煙が立ちのぼる。

ネックラインや袖ぐりには西洋風のフリルがつく。羅紗はヨーロッパからの輸入品。菊の文様があしらわれた襟の織物は中国・明からの渡来品。ぜいたく、かつ国際色豊かな作品である。裏地にはぎっしりと桐文が配されている。



3 羽柴秀吉書状 (天正 10 年) 7 月 7 日付 徳川家康宛 (出品番号 38)

大阪城天守閣蔵

秀吉が本能寺の変の翌月、天正 10 年 (1582) 7 月に徳川家康へ送った手紙である。

「こんど信長に思いがけないことが起こり、信濃・甲斐・上野に配属されていた(織田家の)者どもが撤退しました。これら 3 国が敵の手に渡ってはなりませんので、(家康が)出兵なされ、獲得されるのがよいと存じます。」

関東の織田家領国に派遣されていた滝川一益らは、信長の死後、大混乱のなか撤退を余儀なくされた。領主不在となった地域には、武田家の旧臣や北条氏が触手をのばしていた。この状況をうけて秀吉は、信長と同盟関係にあった家康に空白地帯への派兵を丁重にうながしたのである。

家康はこの手紙をまつことなく、すでに甲斐に出馬して領地拡大につとめていた。



【釈文】

今度、信長不慮之事御座候付而、信州・甲州・上州二被置候者共、罷退候。然者、両三ヶ国之儀、敵方江非可被成御渡儀候条、御人数被遣、被属御手候之様二被仰付尤存候。猶追而可得御意候。恐惶謹言

七月七日 羽柴筑前守

秀吉 (花押)

家康様 参人々御中

4 ^{あきくさまきえすずりばに}秋草蒔絵硯箱 （出品番号 58）

大阪城天守閣蔵

九州の大名^{ごとうはるまさ}五島玄雅が豊臣秀吉から拝領し、同家の家宝として伝来した。もとは秀吉が酒をあたためるのに用いた鍋のふただったという。拝領後に硯箱に作りかえられたとみられる。

ふたの表面には菊や萩など、秋の草花が粋いっぱい描かれる。すすきの勢いよく伸びる葉と、すべり落ち飛散する露玉が躍動感を表現する。

桃山時代、斬新な蒔絵調度品が上流階級で大流行して、権力者たちの身边を飾った。秀吉の正妻おねが京都に建立した高台寺の内装や調度品に特徴的な様式であることから、「高台寺蒔絵」と呼ばれる。秋草のようなありふれた自然美を大胆にとりあげ、漆黒と黄金のコントラストで表現する本品は、その代表的な作例である。



5 重要文化財 豊臣秀吉自筆辞世和歌 (出品番号 83)

*展示は8月9日～9月10日

大阪城天守閣蔵

つゆと^(露)を^(落)ち つゆと^(消)きに^(身)し わか^(身)みな

なにわの事も ゆめの又ゆめ 松

死期の近づいたことを察知した秀吉がつくった辞世の和歌。「草の葉をすべり落ちる秋の朝露のよ
うに、一瞬で消えてゆくわが身であるよ。大坂でのことも、何もかも、夢のなかで見た夢のようで、
たよりない」と、人生のはかなさを詠じている。「なにわ」は「難波」^{なにわ}と「何もかも」の意味の掛け
ことば。「松」は秀吉の雅号^{がこう}である。秀吉は慶長3年(1598)の秋、8月18日に伏見城で62歳の生
涯を閉じた。

この秀吉自筆の辞世和歌は、正妻おねの手もとで保管され、その没後はおねの実家である備中足
守藩主木下家に江戸時代をつうじて伝来した。



6 重要文化財 大坂夏の陣図屏風 (出品番号 101)

*右隻は9月11日～10月13日、左隻は8月9日～9月10日に展示

大阪城天守閣蔵

大坂夏の陣の決戦日の光景を描く。参戦した黒田長政の指示で制作されたといわれ、福岡藩主黒田家に伝来した。7,103名もの人々を活写した合戦図屏風の傑作である。

右隻の中央、四天王寺の石鳥居付近では真田幸村が力強く采配を振る。徳川家康は画面の右端で指令を飛ばす。この2人をふくめ21名の武将が旗指物などから特定できる。城外には豊臣秀頼の金瓢傘の馬じるしを掲げた一隊も見えるが、これは秀頼の近臣が馬じるしを預かって出陣した欺瞞作戦。秀頼本人の姿は神聖化するかのように、本丸桜門のかげに隠され描かれない。

右隻の左端、落城寸前の天守の窓からは女性たちが涙ながらに戦況を見つめる。

左隻は落城後の場景。敗残兵や避難民が徳川兵や盗賊に襲われる。



右隻部分



左隻部分